

文語日誌（平成二十六年十二月九日）

水道橋驛近くの國文學専門古書肆日本書房のワゴン、文語學習者にとりては、寶の山といふべし。先日入手したるは、「明治文抄第二」、價僅かに百圓也。明治時代の名文を収録したるものの端本にて、編輯者は宮城縣士族高橋易直。和綴、毛筆體印刷、明治十年版權取得、出版人は東京府平民山中市兵衛なり。

冒頭は伊藤博文の文章なり。曰く、『英國議院章程譯成る、議院の式目載せて餘蘊なし。民選議院の説（中略）諸子の譯述陸續として出づ。而して其細條詳目に涉る者は、此書を以て初とす』と。當時の我が國外國制度を眞摯に學ばんとする政治狀況に思ひを致す。次にあるは勝海舟。「大日本沿海略圖題言」に曰く、『古今航海の術日に盛んに、而して環海の航船絡繹として絶えず。然れども間々針路を差（たが）へて暗礁砂洲の爲に危難に遭ふ者少なからず。』と。航海術の權威、勝海舟の言葉なれば、發言に重みあり。

續くは前島密。「商家必攜序」に曰く、『亞細亞の歴世を通觀するに、概して商を賤する風習あるは、乃ち建國の法に原由すれども、其の商たるもの大抵不學にして、徒に錙銖（ごく少き目方）の利を争ひ、壟斷の私を圖り、自ら卑しきに居れるに因れり』と。かゝる商人の地位、其の後の向上したるは、前島らの努力も幾許かは寄與したりけむ。

榎本武揚、「朝鮮事情序」に曰く、『朝鮮國外人の國內に入るを嚴禁するを以て世人其國狀を知る由なし』、『現下朝鮮の國情に通ずる者は、佛國宣教師に如く者無し。「シアールダレー」なる者あり、羅馬法皇の意を受け、久しく朝鮮に在り、二三年前病を以て國に歸り一書、高麗洋教史略を著す。』と。今や知られざる歴史の一齣と云ふべし。

福澤諭吉、「西洋旅案内序」に曰く、『余が性質旅行を好み、幸に其の機會を得て萬延申の年始めて「カルホルニヤ」に航海し、其の後文久戊の年は歐羅巴の諸國を巡歴し、今茲は又「ワシントン」「ニューヨルク」へ行き、都合三度外國の旅行せしが、いろいろ珍しき事を見聞し、其の國々の人情風俗も分りて、心得となることも少なからず。』と。如何にも諭吉本人の回想と見ゆ。

澁澤榮一、「會社辨紋」に曰く、『靈妙の智を稟け、天地間に立ち、造化の效用を輔弼し、萬物の化育を贊成する、之を人の任と云ふ。而して其任を有する者、相集り相資けて、一地方に特立し、卓然他に愧るなき、此れ國の稱ある所以なり。故に其國の盛衰榮辱、單に其人の智慧勤惰に關らざるなし。』と。用語の選擇、現代人とは大いに異なるの感あり。（例へば、『化育を贊成する』は『化育に貢獻する』に、『一地方に特立し』は、『夫々の地方に特色の文化を育み』に、『單に』は『偏へに』などとなるべき處なり。）

明治人たちの文章に顯はれたる氣概、改めて學ぶべきこと多々ありと思ふ次第なり。

（追記）「明治文抄」、インターネットにて無料にて讀むこと可能なり。

<http://school.njil.ac.jp/kindai/OWND/OWND-00108.html>